

〈笈谷石資料紹介〉

大日寺の笈谷石製十王信仰群像（青森県むつ市）

三井紀生

はじめに

若越商人と南部藩の係わりは旧く、具体的に挙げると文禄・慶長の役の時、敦賀の商人道川三郎左衛門は、南部信直・利直が豊臣秀吉に悶するに当り、武具を田名部から肥前国名護屋まで輸送した事や調達金の御用達した功により、慶長五年（一六〇〇）、道川船の南部領内における諸役を免除された。^① また新保の商人久末久五郎は、元和元年（一六一五）、大坂の陣の際に兵や武具を輸送、翌二年の南部領飢饉に際し米千俵を輸送したことにより船十七艘の田名部諸湊^②における諸役が免除された。^③

以降、下北における若越商人の活動が顕著になり、とりわけ寛文から延宝年間にかけて下北の木材の運上請負事業のため多くの新保の商人が入り出した。久末のほかに、竹内（義左衛門・久助・傳三郎）、上林（武兵衛・与三右衛門・仁左衛門）、上野（七太夫・七右

衛門・六郎兵衛・平太夫）、道実（与六）、中村（新兵衛）、山岸屋（太兵衛）などの名が見える。

笈谷石造物も寛永年間頃からもたらされ、これまでの調査による最古紀年銘は、円通寺（むつ市）に所在する寛永四年（一六二七）銘の五輪塔、以降十七世紀後期頃までの紀年銘を有する高さが二メートルクラスの五輪塔や三界万霊等、仏像を収蔵する大型の石龕、六地藏などの仏像など中・大型の石造物が多く移入された。今回、これまでの調査の中に未だ他に例を見ない笈谷石製十王信仰群像の所在が確認されたので紹介するものである。

一 下北地方の信仰の特色

下北半島の真ん中に高野山、比叡山と並んで日本三大霊山の一山と称される恐山がある。^④ 陸奥湾に沿うJR大湊線の下北駅周辺から



下北駅辺りから望む釜臥山

眺めると全貌が見える釜臥山の頂上奥に地藏山を背にして釜臥山菩提寺（本坊は曹洞宗円通寺（むつ市））がある。

カルデラ湖の宇曽利湖を中心に、周囲を釜臥山、大尽山、小尽山、北国山、屏風山、剣の山、地藏山、鶏頭山八峰が蓮の花弁が重なり合うように囲む（これらの山を総称して恐山という）。湖から流れ出る三途の川（津軽海峡へ流れる正津川の源流部を指して呼称）の橋を渡って寺の境内へ至るが、樹木は少なく、真っ白な岩肌と砂に覆われた荒涼索漠とした地形である。山門の奥手には菩提寺の本堂が見え、本尊の延命地藏菩薩が祀られている。

本堂に向かって左手には地下から噴出する白煙が立ち込め、硫黄の臭いが鼻をつく。この辺り血の池地獄などいくつかの地獄や賽の河原があり、さらに進んでいくと極楽浜と称する宇曽利湖畔の真っ白な砂浜に至る。まさに死後の世界を具現化した風景であるという。

下北地方では、山（恐山）は死者の供養の場としてとらえられ、「人は死んだらお山さ《へ》いぐ《く》」そして「お山に行けば死者に会える」との説により、地藏信仰が盛んになり、山への参詣者が

多くなったという。旧暦の毎年六月十八から二十四日まで七日間地藏堂の祭典が行われた（現在は七月二十日から二十四日）。十王群像もこうした信仰のもとで造立されたものと考えられ、下北地方の特色が伺える。

二 十王信仰について

「人間をはじめとするすべての生あるもの（衆生）は、死後に中陰（死してから次の世の生まれかわる先が決まるまでの期間、中有ともいう四十九日間）と呼ばれる存在になり、初七日～七七日（四十九日）および百か日、一周忌、三回忌に順次十王の審理を受ける」という信仰である。また、生前に十王を祀れば死後に罪を軽減してもらえするという信仰もあり、これを「逆修」（または「予修」という）。

十王思想は中国で仏教と道教が習合して生まれ、平安時代末期に日本に伝来し、日本では、『地藏十王経』（『地藏菩薩発心因縁十王経』）による冥界思想として発展し、室町時代に盛んになったといわれている。

十王と六地藏 十王は冥界（死後の世界）において衆生を裁く十人の裁判官である。

通常死者の審理は死後四十九日間に七回行われ、最初が初七日で秦広王の審理、二七日には初江王・五七日（三十五日目）に閻魔王・、そして七七日（四十九日目）に太山王から裁定が下され

十王と本地仏

発祥・変遷	N0	追善供養	十 王			本地仏
			名 称	審理の内容	備 考	名 称
死後審判思想 インドで発祥 死者の審理 (7回)		生命尽→亡者	(閻魔王の使者)		奪魂・奪精・奪魄鬼 死天の門前へ	***
		死出の山 →葬頭河	(奪衣婆・懸衣翁)		葬頭河； 奈河津・三途川とも	***
	1	初七日	秦広王	生前の所業		不動明王
	2	二七日	初江王	殺生の罪		釈迦如来
	3	三七日	宋帝王	邪淫の罪		文殊菩薩
	4	四七日	五官王	罪の軽重	秤量舎、勘録舎	普賢菩薩
	5	五七日	閻魔王	罪を裁く	司命・司録 大山府君・閻間天女 浄頗梨(王鏡)	地藏菩薩
	6	六七日	變成生	閻魔の裁きの 再審査		弥勒菩薩
	7	七七日	太山王	判決を下す	満中陰 六道のいずれかへ	薬師如来
中国で追加 追加の審理 (3回)	8	百カ日	平等王		卒哭忌	聖観音菩薩
	9	一周忌	都市王			勢至菩薩
	10	三回忌	五道転輪王			阿弥陀如来

註 日本でさらに七回忌(蓮華王、本地 阿閼如来)、十三回忌(祇園王、本地 大日如来)、三十三回忌
(法界王、本地 虚空蔵菩薩)が追加され、本地仏の十三仏を祀ることが多い。

行き先である六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道）のいずれかが決まる。七回で決まらない場合追加の審理が三回、平等王（百か日）、都市王（一周忌）、五道転輪王（三回忌）がある。仏事の法要が上記の区切りに行われるのは、審理の度に十王に対して死者への減罪の嘆願を行うためのものであり、七回が終わると満中陰の状態つまり忌明けとなる。七回で決まらない場合でも六道のいずれかへ行くことになっている。

追加の審理は、その後の救済措置でもある。そして、本尊地藏の分身である六地藏が六道における救済の役割を担うとされている。

本尊地藏 十王の群像を安置する場合、地藏を加えることが多い。

神仏習合・本地垂迹説によれば、閻魔王は地藏の化身とされ、閻魔と雖も慈悲があるという考えのもと本地仏の地藏を加えているのであろう。

閻魔王以外の九王についても本地仏が定められており、これらの本地仏を十仏として安置している例も散見される（表「十王と本地仏」参照）。

奪衣婆 冥界の葬頭河あるいは奈加津（三途川とも）の渡り場で亡者の衣類を剥ぎ取る老婆、懸衣翁と呼ぶ老翁がそばにいて奪衣婆が剥ぎ取った衣類を樹に懸ける。懸けられた枝のたわみ具合により罪の重さが判定され、三か所ある渡り場のいずれかが決まるという。その他 閻魔王の臣官である司録と司命（閻魔王の審理を記録する役人と読み上げる役人）を加えた例もある。

三 大日寺の十王群像

毎年加賀市で開催される全国北前船セミナーに参加して旧知になつてゐる菊池充三、三浦順一郎両氏（むつ市在住）が、下北地方の笏谷石造物の調査・研究に力を注いでいる。

両氏は平成二十三年（二〇一一）、むつ市関根（むつ市の中心田名部から大間道（国道二七九号）を凡そ八キロ北上し、大畑町とのおよそ中間点あたりに位置する）に所在する青雲山大日寺^⑤に笏谷石製の十王信仰群像が遺存することを確認、三浦氏は著書にて各像について詳しく発表された。^⑥

平成二十八年（二〇一六）七月三日むつ市を訪問し、両氏の案内により現物を実見した。一部の像に補修の跡が見られるが、遺失している像はないようで、保存状態も比較的良好、かつ奉納者、奉納目的、紀年銘も刻み、冥界信仰に篤い当地にふさわしい現物資料といえる。

群像の構成、紀年銘、奉納目的と願主などは次の通りである。

構成

- 十王 （十鉢） 衣冠束帯の立像 像高二六・二九・九センチ
 本尊地藏（一鉢） 円光背、未開蓮華を持つ立像 像高二九センチ
 六地藏 （六鉢） 舟形光背を有する立像 像高三六・五・四センチ
 その他 （四鉢） 奪衣婆坐像（一鉢）、如来坐像（二鉢） 釈迦と阿弥陀（カ）、聖徳太子坐像（一鉢）

像高十六・七・十九・二センチ

紀年銘 万治二年（一六五九）己亥十月、坐像四鉢には紀年銘は認められない。

奉納目的 父母の菩提供養

願主 北関根村掃部

各像に刻まれている銘文は次の通り。

十王（背部） 「万治二 為父母

（名称）□□□□（番号）□□

亥十月日 願主／掃部」

十像とも同じ形式で、閻魔王なら、名称欄は「閻魔王」、番号欄は「第五」と刻す。

本尊地藏（背部）「明□十殿王 為父母菩提也

奉 本尊地藏 薩埵

万治二年己亥十月吉日 願主／掃部／北関根村」

六地藏（光背前面） 右「奉建立地藏爲父母菩提也

左「万治二己亥十月吉日 願主北関根掃部」

六像とも同じ刻銘

以上に記す個々の像の画像と法量は、本稿末 写真資料「大日寺の十王群像1、2」に示す。

越前では、木造の十王像は八幡神社（越前市朽飯町）や大谷寺（越前町）などで散見される。笏谷石造りの十王像は、あわら市熊坂に例があるが、六地藏を組み合わせて一括奉納されている他例は未だ知らない。



大日寺の十王群像 平成 28 年 7 月 3 日撮影（現在は非公開）



大日寺の六地藏 平成 28 年 7 月 3 日撮影

奪衣婆は、一緒に遺存する如来二坐像・聖徳太子坐像と造形・法量が類似かつ銘文も見られない。しかし一般的に十王と一緒に奉納されるので、銘文は確認できないが十王や六地藏と同じ時期に奉納されたと思われる。

四 奉納者関根村掃部について

群像を奉納した北関根村の掃部とはどういう人物であつたろうか。大日寺が菩提寺で姓は畠山といい、歴代掃部名でこの村の肝煎を務めていたと思われ、史料中にも目にする名前である。

十王信仰群像を奉納した掃部に係ると思われる史料をいくつか挙げてみると、

文書では、『原始謄筆風土年表』の万治元年（一六五八）の項に「小目名にも久慈才佐と聞へしハ正津川谷地出戸平戸等を開発たらん志念にて関根畠山掃部と云るを詢んに此許鞍馬にて来往せしとは此頃迄風流儀残り（以下略）」と記述がある（十王群像に刻まれている紀年銘は万治二年である）。

石造物では、大日寺の畠山家の墓地に地輪の正面に法名「即圓□心居士」、側面に「関根掃部」を刻む（紀年銘は不詳）高さ六十四センチの笏谷石製の一石五輪塔が遺存している（画像は本稿末の写真資料参照）。

円通寺（むつ市）の墓地には笏谷石製の「有縁無縁三界万霊等」に掃部銘を遺している。この塔の紀年銘は元禄七年（一六九四）、

施主は坪長助母、菊池治五兵衛母、上林与左衛門母、ほかに関根村掃部、薦沢村・川臺村（いずれも関根村の朶）を刻している。坪長助と菊池治五兵衛は大畑の旦那、上林与左衛門は越前新保の商人である。畠山掃部は、新保の商人とも親交があったことが伺える。

おわりに

下北地方は、地藏信仰が深く浸透し、恐山は死後の世界との接点の場として敬虔な場所である。そして、当然のことながら死者の菩提を弔うための墓碑や仏像類も必要とされた。

『原始謾筆風土年表』慶安三年（一六五〇）の項に大畑の円祥山大安寺の石碑について「（前文略）此以前石工等も有へからねと船に（荷）便て積寄さるハ卒塔婆而已にて（以下略）」とあり、墓碑・石塔などは他の地方からの移入によっていたことが伺える^⑧。

この頃既に若越の廻船が田名部諸港へ入港しており、寛文・延宝年間には最盛期を迎えた。下北地方へはこの時期に多くの大・中型の笏谷石造物が、以後は『原始謾筆風土年表』の元文二年（一七三七）の項に「松前より三百石積繩緘船入津 越前新保より石室、水屋（はしり）、井牖（いとわく）、樹盤（せきたい）、戸闔（としきみ）、板石、角石、地覆、石塔（ふりがなは同書による）相馬の五大力船にハ（以下略）」と記述があるように、十八世紀には汎用性のある小型の規格品が、継続して大量に運ばれてきた。

当地にのこされている笏谷石造物の種類と数の多さを見ると、近

世における笏谷石造物の宝庫といっても過言ではない。新保商人の功績も忘れてはならない。

大日寺の十王信仰群像は、下北地方における笏谷石の石造物としては初期の遺品、しかも地域の信仰に融合した群像であり、歴史資料としても貴重な存在であることは言うまでもなく、末長く伝えたいものだ。

謝辞 現物画像公表に当たり青雲山大日寺の高橋正志住職に特別のご配慮を頂いた。ここに、衷心より謝辞申し上げる次第である。

参考文献

（1）「道川文書二六 南部利直判物」『敦賀市史 資料編一卷』敦賀市、一九七七年

其方船我等領内何の津へ罷越候共、役儀一切有間敷もの也

慶長五年七月二日 （南部）利直（黒印）

道川三郎右衛門とのへ

* 南部利直：陸奥南部藩初代藩主。慶長四年（一五九九）家督相続、

寛永九年（一六三二）没。

（2）南部藩領の下北諸湊の総称、十七世紀前期は、対象湊の出入りの変化はあるが大畑、大間、奥戸（おこっぺ）、大平、九艘泊など七湊で主に木材の交易がおこなわれた。

（3）「由緒記」「久末文書」『三国町史 海運記録』三国町、一九七三年

「元和元年大坂陣之時 信濃守様（南部利直）御代先祖（久末）久五郎船二而被為成御往来、其上御金御用達、元和二年御領内大凶作之時右久五郎

手船ニ而米積下り御用ニ相達右兩度之為御褒美、久五郎手船大小拾七艘有之候処不殘諸役御免ニ被仰付手船へ御焼印被成下御料内江入船仕諸役御免ニ御座候、(以下略)

(4) 本稿では富士山、白山、立山三山を「日本三靈山」、恐山、比叡山、高野山三山を「日本三大靈山」と区別している。

(5) 大日寺は、明治初年までは「大日如来堂」と称していたが、神仏判然令公布後、仏像(大日如来)を円通寺に移し、「神明宮」に改めた。のちに仏像は堂に戻され、昭和三十九年曹洞宗の寺院として開山となった。(『新撰陸奥国誌』、『田名部町誌』)

(6) 三浦順一郎『下北地域史話』(私家版、二〇一五年)に「大日寺の六地藏と十王について」と題して調査結果を詳しく述べている。

(7) 村林源助『原始謾筆風土年表』文化元年〜文政元年浄書(みちのく叢書第六、七巻 青森県文化財保護協会編 国書刊行会、一九八二年)

同書六卷九頁「万治元年」の項に記述している。

(8) 同註7 同書六卷六頁「慶安三年」の項に記述

(9) 鳴海健太郎『下北の海運と文化(青森県の文化シリーズ一〇)』(北方新社、一九七七年)の「下北半島海運史略年表」中に「正保年間(一六四四〜四七)大畑の墓石の大部分を新保湊より運ぶ(新保石)」と記されている。

(10) 同註7 同書三十七頁「元文二年」の項に記述

(11) 縄緘船(なわしめせん)は、縄綴船(なわとじせん)とも言い、アイヌ人の使う素朴な船につけた名称。構造上は船の両舷に一〜二枚の板を縄でとじ合わせて積載量をふやした船。(『日本交通史辞典』)

写真資料

大日寺の十王群像 2

(法量単位cm)

奪衣婆 像高 19.2 総高 24.2	釈迦如来 像高 16.7 総高 24.2	阿弥陀如来力 像高 17.0 総高 24.7	聖徳太子 像高 18.7 総高 24.0
			
本尊地藏 像高 29.0 総高 47.0	背面の銘文	六地藏 1 華盤 像高 37.5 総高 75.5	六地藏 2 念珠 像高 37.0 総高 76.5
			
六地藏 3 宝珠 像高 36.5 総高 74.0	六地藏 4 錫杖・宝珠 像高 38.5 総高 77.0	六地藏 5 合掌 像高 39.5 総高 75.5	六地藏 6 未開蓮華 像高 40.0 総高 76.5
			